

m以下を守り、風の穏やかな午前中や夕刻に実施すれば、トビイロウンカに対する無人ヘリ防除は十分な防除効果が得られると考えられる。

### 熊本県におけるトビイロウンカに対する 無人ヘリ防除の再検証試験

西本 佳子・柳 真一<sup>1)</sup>・行徳 裕・  
小牧 孝一  
(熊本農研セ・<sup>1)</sup>農水協)

無人ヘリ防除における薬剤の落下分散及びトビイロウンカに対する防除効果について、イネの出穂の有無が与える影響を含め再検証を行った。供試薬剤にはプロフェジンを用いた。風速1 m以下のほぼ無風状態における無人ヘリ早朝散布は、イネ出穂前では草冠・株元ともほぼ同等の落下分散が認められた。一方イネ出穂後は草冠に比べ株元への落下分散はやや劣った。風速1 m強のほぼ無風状態における日中の無人ヘリ散布は、イネ出穂前であっても草冠に比べ株元への落下分散はやや劣った。トビイロウンカに対する防除効果は、無人ヘリ散布、動力噴霧器散布とも若齢幼虫が増加したが、効果の程度はイネの出穂にかかわらず、無人ヘリ散布は動力噴霧器散布と同等以上であった。

### 沖縄県における2006年のウンカ類の異常 多飛来について

河村 太・安藤 緑樹・村上 昭人・  
二神 和靖・上里 卓己・金城 衣恵・  
貴島 圭介・谷口 昌弘・新里 仁克<sup>1)</sup>・  
石原 博一  
(沖縄病虫害防除セ・<sup>1)</sup>沖縄八重山農改セ)

2006年8月26日～9月4日にかけて、沖縄県でイネウンカ類の異常多飛来がみられた。種類は、多い順にトビイロウンカ、セジロウンカ、ヒメトビウンカであった。県内7市町村の予察灯(60W白熱灯)及び街灯(蛍光灯)への飛来のピーク日は、石垣市では8月30～31日、宮古および沖縄島では8月30日～9月1日であると推察された。石垣市の予察灯におけるウンカ類捕獲数は、沖縄島金武町及び宮古島市のそれより少なかった。水稻(2期作)圃場における個体群密度は、沖縄島の西側(4市村)では1.71～3.04頭/株と高く、東側(金武町)、石垣市および与那国町では、0.30頭/株以下と低かった。飛来源を「リアルタイムウンカ飛来予測」(農研機構中央農研ら共同開発)より検討した結果、8月27日に台北周辺地域を飛び立った個体群が主要飛来集団で、沖縄島

には福建省沿岸部の集団も多く飛来したと推察された。

### 福岡県におけるイネ縞葉枯病の発生動向 および媒介虫ヒメトビウンカの薬剤感受 性について

村上 英子・城戸 康博・浦川 志穂  
(福岡県防除所)

福岡県における縞葉枯病発生面積が近年増加傾向にあり、一部地域では縞葉枯病が多発生し問題となっている。また、ヒメトビウンカ越冬虫のウイルス保毒虫率は2003年以降急増しており、保毒虫率が12%を超える地域もある。本病の感染防止には保毒虫防除が重要であるため、ウンカ類防除薬剤に対するヒメトビウンカの薬剤感受性を確認した。縞葉枯病が多発生し、ウイルス保毒虫率が高い5地域からヒメトビウンカを採集し、微量局所施用法を用いて薬剤感受性検定を行った。薬剤施用24時間後のLD50値はイミダクロプリド、ジノテフラン、シラフルオフェン、エトフェンブロックスでは低かった。フィプロニルでは非常に高かったが、48時間後には急激に低下し、本個体群に対し殺虫活性の発現に時間を要することが明らかになった。フィプロニルは各種薬剤施用量と死亡率の関係を示した回帰直線の傾きが、他の薬剤と比較して非常に緩やかであることから、本個体群は抵抗性個体群の可能性があると考えられた。

### クモヘリカメムシの雄トラップにおける 寄主植物別の誘引効果について

本田 善之・河村 俊和・東浦 祥光  
(山口農試)

クモヘリカメムシ(クモヘリ)は主要な斑点米カメムシで、近年斑点米が増加傾向にあり効率的な防除が求められているが未解決である。よってクモヘリのほ場での発生状況に応じた防除技術を確立するため、クモヘリの誘引生態の解明と既存合成誘引物質(P)トラップを検証した。2005年6月28日～7月21日の試験では誘殺数が少なく差が見られなかった。7月21日～8月9日の試験では雑草に設置した場合、エノコログサやヒエのみのトラップ、♂のみのトラップ、Pのみのトラップでは誘引効果が低く、寄主植物(エノコログサ、ヒエ)と共に雄を入れたトラップに雌雄幼虫が多く誘引され、寄主植物間には差がなかった。8月11日～9月15日の試験でも雑草・出穂前後の水田に設置した場合、Pのみのトラップでは誘引効果が低く、寄主植物(エノコロ、ヒエ、イネ)と共に雄を入れたトラップで多く誘殺され、寄主